『ユービック』論[1]

―境界線を揺るがす集合的無意識―

A Study on *Ubik* [1]: Collective unconscious that makes boundaries unstable

川本 真弓

Mayu Kawamoto

Abstract

In *Ubik,* “half-lifers” live in a different reality from ours, which has emerged out of “half-lifer’s” unconsciousness. “Half-lifers” are living between life and death, and they don’t know if they are alive or dead, if they live in reality or in virtual reality. The multilayered fiction *Ubik* makes us wonder what is the “reality” for “half-lifers,” furthermore, what is the “reality” for us human beings.

In this paper, I adopt the idea of the “collective unconscious” that psychologist Carl Gustav Jung proposed, in order to show how the unconsciousness of “half-lifers” interferes with each other intricately. Through this analysis, the “ultimate reality” that P. K. Dick had gained in his own work will be revealed.

はじめに

20 世紀を代表するアメリカの SF 作家 P.K.ディック（以下ディック）は、生涯をかけて「本物」の現実とは何か、「本物」の人間とは何かという問いに向き合い続けてきた作家である。特に、ディックの作風が転換した[1]とされる 1970 年の直前、1969 年に書かれた『ユービック』は、彼の創作活動の中で 1 つの区切りとして捉えられる。ディックが「本物」の現実とは何かという問いに 1 つの結論を見いだした、60 年代作品の集大成と言えるだろう。そのため『ユービック』は、ディックが執筆した 44 作の長編の中でも、現実が複雑な多層世界として描かれた、物語の真相を探ることが特に難解な作品の 1 つとして知られている。その理由は、大半のフィクション作品で暗黙の了解とされている、普遍的な世界の法則が存在しないからである。

『ユービック』には、「安息所（モラトリアム）」と呼ばれる施設が登場する。ここでは、一度死亡した人間を冷凍棺に保管し、特別な装置を使用して脳波を読み取ることで、死者と生者の対話を可能にしている。安息所に安置されている死者たちは、半生者と呼ばれ、通常は夢を見続けているような状態で半生世界を生きている。半生世界は半生者の無意識の働きによって形成される仮想

現実であるが、こうした精神世界には、物質そのものが存在しない。そのため、物語が進むにつれて日用品などの物体が原型を止められず崩壊するという、不可思議な現象が次々に起こる。この半生世界の概念が、『ユービック』において「本物」の現実を見失わせ、読者を混乱させる仕掛けとなっている。更にディックは、ユングやラカンといった心理学者や哲学者の書物を多量に愛読しており、その影響を受けていたことは間違いない。特に、ユングが提唱した集合的無意識の概念は、ディックの本来の思想と共鳴したことも相まって、半生者の世界に投影されているはずである。こうした知識と思想も、物語を複雑化させる一因となっているのではないだろうか。

半生世界の特殊性について、ディックと同時代に活躍したポーランドの SF 作家であり、評論家でもある S.レムは、「リアリズム小説は、このような死後の世界を描くことはできない。リアリズムの原則が、そのような描写を排除しているからである。しかしながら、もしも死者たちの“半生命”を可能にする技術を仮定するならば、作者が自分の登場人物たちに対して忠実でありつづけ、彼らを追ってさらに物語を続けてゆくことを禁ずるものは何もない」[2]と説明している。つまりディックは、半生世界という特殊な環境を科学的土台から作り出すことによって、これまで形而上学的にしか論じられてこなかった概念を、SF を使って可視化させたのである。複雑な層をなした『ユービック』の世界は、「本物」の現実とは何なのかという疑問を投げかけてくる。このことは、『ユービック』の構造が現代においても斬新なアイデアであり続け、主観的な視野を巡る深いテーマを持った作品であることを示している。

本稿では、半生世界と「本物」の現実を隔てる境界線に着目し、半生者が抱く認識の変化が与える境界線への影響を分析する。そこに、ディックが関心を抱いていたユングの集合的無意識という概念を適用し、他者から自己への無意識的な介入がもたらす異変の正体を突き止めることで、ディックが到達した「本物」の現実を追求する。

1.　『ユービック』[3]解釈の前提

ここでは、様々な解釈を可能にする『ユービック』の前提を 1 つに絞ることにする。まず、本章を進行する上で、便宜上、月での爆発以降の物語の解釈を以下の 4 つの可能性に分類する。

可能性 A

現実世界ではチップと 11 人の不活性者は生き延び、グレン・ランシター（以下ランシター）だけが死亡した

可能性 B

現実世界ではチップと 11 人の不活性者は死亡し、ランシターだけが生き残った

可能性 C

現実世界では月で全員が死亡し、全員が半生世界で生存している

可能性 D

現実世界では月で全員が死亡し、ランシターはチップの半生世界とは別のどこかで生存している

本論を進める上で前提となる『ユービック』における真実を、この 4 つの可能性の妥当性について検討をすることで、可能性をいずれか 1 つに絞って分析する。

はじめに可能性 A［現実世界ではチップと 11 人の不活性者は生き延び、ランシターだけが死亡した］であるが、チップたちはランシターの遺体を地球に運び、ランシターの葬儀を行う。しかし、月での爆発以降、チップたちの現実世界では次々に異変が起こり始める。新品のタバコが崩れたり、クリームが腐敗したりする物体の衰退現象と、紙マッチや紙幣にランシターのメッセージや顔が浮かび上がる、「ランシターの実体化現象」である。こうした現象は、チップたちが月に到着する以前の「本物」の現実世界の物理的法則を明らかに崩壊させている現象であるため、この世界を「本物」の現実とは言えない。よって、可能性 A は否定される。

次に、可能性 B［現実世界ではチップと 11 人の不活性者は死亡し、ランシターだけが生き残った］を考える。ランシターは、実体化現象によって半生世界に存在するチップの前に姿を現す。そしてチップに、ランシターは安息所に安置されたチップと 11 人の不活性者に、何度も交信を試みたのち、ようやくチップの半生世界に入り込むことが出来たと告げる。しかし、安息所の半生者たちを次々に襲うジョリーの話によれば、生者が半生者の世界に入ってこられるとしたら、言葉だけのはずなのである。そのため、半生世界に実体を伴って侵入してきたランシターが、「本物」の現実で生存し続けていることは考えにくい。更には、物語の最後に、ランシターが所持していた硬貨にチップの顔が浮かび上がるというチップの実体化現象が発生したことから、ランシターは半生世界にいることが裏付けられ、可能性 B も否定される。

続いて可能性 C［現実世界では月で全員が死亡し、全員が半生世界で生存している］を検証する。ここでは、全員が「本物」の現実では冷凍棺に安置され、互いの意識の間で交信し合っていると仮定する。この可能性は、一見辻褄が合うように思われるが、まだ疑問は残る。例えば、ジョリーとランシターの関係である。ジョリーは〈愛しい同胞の安息所（ビラブド・ブレスレン・モラトリアム）〉に長い間安置されている半生者であり、安息所に並べられている他の半生者の意識を自由に行き来することができる。更には、半生者たちを自分で創造した疑似現実の中に誘い込んで襲うのである。チップの仲間たちも、ジョリーの創造した世界の中で 1 人ずつ殺されていった。しかし、ランシターだけが例外なのである。チップ達が半生世界に入り込んで以来、ランシターはチップたちと共に行動しておらず、ジョリーにはランシターの姿や気配は感じとることができない。これらの疑問から、可能性 C の世界が真実とは言い切れないのである。

以上のことを踏まえると、可能性 D［現実世界では月で全員が死亡し、ランシターはチップの半生世界とは別のどこかで生存している］が最も有力な解釈だと考えられる。この結論は、

ダルコ・スーヴィンが、「この小説を解明するような説明はありえない」[4]と述べているように、解明された結論ではない。しかし、本論ではこの可能性 D を前提とし、『ユービック』において現実世界に代わる諸世界で、「本物」の現実がどのように判断されていくのかを追究していく。

2.「本物」の現実と半生世界の境界

『ユービック』を解釈する可能性として最も有力なのは、可能性 D の［月で全員が死亡したが、ランシターはチップの半生世界とは別のどこかで生存している。］となった。複雑な多層世界で、ランシターが存在している「別のどこか」がどこに存在するのかを模索し、それを元に半生者における現実を追究する。

2.1 明確な境界線

ここで言う境界線とは、「本物」の現実と半生世界の間に生じる、チップを主体とした、登場人物たちの認識上の境界線を指すこととする。

まず、チップが存在する世界に注目し、「本物」の現実と「偽物」の現実の相違を探っていきたい。

『ユービック』では、チップたちは第 6 章までは確実に「本物」の現実に存在したと考えられる。半生世界のように物体が衰退することはなく、登場人物たちは全ての物事が因果関係に沿って成立する、線的時間軸の上を進んでいる。そして、『ユービック』で唯一正しい時間軸を証明できるのが、不活性者の一人、パット・コンリー（以下パット）の能力であると考えられる。不活性者というのは、『ユービック』における特殊能力者のことである。彼女の能力は、過去にあった出来事を消し去り、現在までの時間の流れや事象を改変することである。1 つ例を挙げると、パットが初めてチップに出会った時、チップの目の前で服を脱ぎ始めたため、チップが動揺する場面がある。

> Pat said, “You don’t remember.”
> “Remember what?”
> “My not taking off my clothes. In another present. You didn’t like that very well, so I eradicated that; hence this.” She stood up lithely. [U.635-636]

パットの “In another present” の言葉が示すように、思い通りに事が運ぶまで、彼女は何度でも時間を戻して現実をやり直すことができる。しかし、このような過去の改変は、前提として、過去と現在と未来が因果関係をもって繋がり合っていなければ不可能なのである。言い換えれば、『ユービック』においては、パットのこの能力だけが「本物」の現実を立証できる唯一の手段と言える。そのため、パットの能力が発動できている間は、チップたちが「本物」の現実に存在するという客観的事実と、チップによる、自分が「本物」の現実に存在するという認識は一致している。しかし、第 7 章以降では、チップたちは半生者となって半生世界にいるにも関

わらず、彼らの認識では「本物」の現実で活動していることになっている。

第 7 章以降、ランシターはチップたちが身を置く世界に発生した異常な衰退現象は、スパイとしてランシター合作社に潜入したパットが原因ではないかと疑っていた。しかし、ランシターはチップの前に現れる以前に、“She did not――repeat, not――try to use her talent following the bomb blast”[U.754] というメッセージをチップに残している。また、パット自身も、“My talent doesn’t work any more. It hasn’t since the bomb blast on Luna”[U.749]と話している。ランシターが、パットは一度も能力を使っていないと断言する通り、本当に能力を使っていないのだとしたら、パットが衰退現象に関わっていると考えるのは矛盾する。また、ランシター合作社の壊滅を達成したパットに、能力を使う理由はないのである。あるいは、読者から見れば、彼女が死亡して半生命状態になったことで能力が消えたことや、半生世界において、物体の衰退や退行などが絶え間なく発生し、時間軸が錯綜しているために彼女の能力が使えなくなったとも考えられる。いずれにしても、パットの能力は発動できない状態になったとするのが妥当であろう。それにも関わらず、チップたちの認識では、この時点で自分が生者として、「本物」の現実に存在すると考えており、彼らにとって半生世界は明確な境界線の先に存在している。この認識のズレが、『ユービック』において真実を見失わせ、客観的事実と主観的事実の間に誤差を招く要因となっているのだ。

以上のことを踏まえると、境界線の所在は、自分が確実に生存しているというチップの認識に懸かっていることが分かる。生者にとって「半生世界」は未知の場所であり、本来認識の外側の世界であったため、半生世界がどのような世界であるかを把握できない以上、チップにとって「本物」の現実と半生世界の間には明確な境界線が引かれているのである。

2.2 揺らぐ境界線

死後間もない半生者たちには、半生世界と「本物」の現実世界を区別することができないことは前述した通りである。その原因には、半生世界が極めて「本物」の現実に似た空間を作り上げていることと、生者に半生世界の知識が無いことが考えられる。こうした状態では、自分が死亡したことに気づく機会を与えられない限り、当事者である登場人物たちにとっては、たとえ「本物」の現実では起こり得ない不可解な事象に直面しても、そこが「本物」の現実であると信じて疑わないのである。しかし逆に言えば、この事実に気づかなかったとしても、半生世界でも「本物」の現実と同様の生活を送ることができれば不都合は無かった。問題なのは、チップたちには半生世界に潜む敵による命の危険があったため、早急に現状に気づく必要があったことである。

月での爆発のあと、チップたちの身に最初に起こる異変は、次のような物体の衰退現象である。

> Joe picked up the coffee cup, and found the coffee cold, inert and ancient; a scummy mold covered the surface. He set the cup back down in revulsion. What’s

going on? [U.681]

そしてもう一つは、チップの元に電話の受話器から一方的にランシターの声が聞こえたり、メンバーの持ち物だった紙マッチや貨幣にランシターの名前や顔が浮き上がったりする（以下「ランシター・マネー」）現象である。

> “Eight of us,” he said, “have what I guess we should call Runciter money, now, to extent. Probably by the end of the day all the money will be Runciter money. Or give it two days.” [U.702]

こうした現象を、チップと不活性者たちは、「ランシターの実体化現象（マニフェステーション）」と呼んだ。これらの現象は明らかに現実の物理的法則に従っていないのだが、誰もこの場が「本物」の現実ではないと疑う者はいない。その後、更に物体の衰退現象は加速し、彼ら自身にも影響を及ぼし始めるようになる。

> On the floor of the closet a huddled heap, dehydrated, almost mummified, lay curled up. Decaying shreds of what seemingly had once been cloth covered most of it, as if it had, by degrees, over a long period of time, retracted into what remained of its garments. [U.696]

このように、不活性者のウェンディ・ライト（以下ウェンディ）はミイラのように衰退し、死亡していたのである。しかし、現場にいるチップたちは、これらの現象が何らかの理由で「本物」の現実で起きている異変として捉え、状況の把握に勤しむのだ。その上、チップは、“He thought. What’s happening to me? His revulsion became, all at once, a weird, nebulous panic” [U.681] というように、自分の方がおかしくなったのではないかという恐怖に駆られる。このように、世界ではなく自分を疑う背景には、チップの認識には未だ「本物」の現実と半生世界の間に明確な境界線があるからである。

その後、ランシターからの一方通行の電話を受けたというチップの話を聞いた不活性者のアル・ハモンド（以下アル）は、次のように現状について考える。

> “I’d feel better about it if von Vogelsang had heard it too. At least that way we could be sure it was there, that it wasn’t an hallucination on your part.” Or, for that matter, he thought, on all our parts. As in the case of the matchfolder. [U.705]

ここにはアルの「本物」であるはずの現実に対する疑念と葛藤がある。この時点で、アルはチ

ップよりも早く、「本物」の現実に対する認識の境界線に揺らぎを見せていた。自分が「本物」の現実にいる実感はあるが、可能性として、物体の衰退現象やランシターの実体化現象といった不可解な現象は「本物」の現実よりも半生世界で起こっていると考える方が適切であると察したのだろう。

ウェンディの死後、チップとアルの二人は身の回りで何が起きているのかを知るために、ランシターの実体化現象による導きを頼りに、ランシターとの連絡を試みる。そして、ついに二人はランシターから、“ALL OF YOU ARE DEAD. I AM ALIVE” [U.717]という決定的な情報を受けて、自分たちが死亡している可能性を知ったのであった。

この時、チップの意識が初めて「本物」の現実から半生世界に向いたことで、チップの境界線は揺らぎを見せる。ここで重要なのは、半生世界の外部にいる何者かが彼らに、彼らが半生世界にいることを気づかせようとしているという点である。当然、この場合の何者かというのはランシターであるのだが、ランシターは実体化現象を引き起こすことでチップたちが身を置く世界に異変をもたらし、彼らが半生世界に存在するというヒントを与え続けていたのだ。こうした外部にいる他者からの介入が、認識を改めるために必要なアプローチとなっている。しかし、チップは半生世界に対する境界線を揺らがせるのだが、ここでもまだ自分が死亡したことに疑問を抱いている。なぜなら、ランシター自身の生存状態が不明だからだ。チップたちはランシターの死亡に立ち会っているため、ランシターのメッセージにどこまで信憑性があるのか判断できないのである。これが『ユービック』を解釈するにあたって、更なる混乱をきたす点でもある。

後にテレビコマーシャルとして実体化したランシターは、半生世界では“world deterioration of this regressive type is a normal experience of many half-lifers, especially in the early stages when ties to the real reality are still very strong”[U.720]と説明する。これに対してチップは、「本物」の現実世界にいるはずのフォン・フォーゲルザングやレイ・ホリスと実際に会話をしたことや、ランシターの発言には矛盾が生じる点から、ランシターの言葉を信用しきれなかった。そして当面の目的として、“One has to pay attention to such admonitions, he realized, if one expects to stay alive—or half-alive” [U.724]と考え、不可解な退行現象から自分の生命を守るため、「ユービック」を探すことを目標にし、自分の現状を一時的に保留したのであった。

1.3 消失した境界

チップは自分の体の衰退現象に抗いながら、ランシターの指示に従って「ユービック」を探しはじめる。しかし何らかの力の妨害に遭い、「ユービック」を手にすることが出来なかった。とうとう死を覚悟したチップであったが、その時ランシターが現れ、チップに「ユービック」をスプレーするのである。そこで二人は、チップの現実について話し合う。ランシターはチップに“I'm Glen Runciter; I'm your boss and I'm the one fighting to save all your lives—I'm the *only* one out here in the real world plugging for you”と言うが、それに対してチップは“You

made up answers; you had to invent them to explain your presence here. All your presence here, your so-called manifestations”[U.773]と答える。そして明確な解答が出ないまま、チップは現実の位置づけを次のように結論づけた。

> “We’re in this,” Joe said, “and you’re sitting out there, out in the lounge, and you can’t do it; you can’t put a stop to the thing we’re involved in. ”
> “That’s right.” Runciter nodded.
> “This is cold-pack,” [U.774]

この時、チップは自分自身が半生状態にあることにようやく確信を持つ。つまり、半生世界への境界線は消失したと言える。そして、ランシター本人は気付いていないが、チップはランシターに“you’re sitting out there”と言っている点で、ランシターは「外側」にはいるが、「本物」の現実にいるわけではないという確信も同時に持っているのだと考えられる。そしてチップは、作品の終盤でランシターの妻、エラ・ランシター（以下エラ）と出会う。エラはそれまで自分が半生命状態で引き受けていたランシターからの相談と、半生者を襲う敵との戦いを、今後はチップに任せたいという内容を次のように話す。

> “It has to be fought on our side of the glass,” Ella said. “By those of us in half-life, those that Jory preys on. You’ll have to take charge, Mr. Chip, after I’m reborn. Do you think you can do that? It’ll be hard. ”…
> To himself Joe thought, I can remember what he did to Wendy. That’ll keep me going. That alone. [U.790]

こうしてチップは、半生世界で直面する様々な現象や敵と戦いながら生きていくことを決意する。この時点で半生世界はチップにとっていわば「本物」の現実となったのである。

ただし、境界線に関して 1 つ触れなければいけないことがある。チップにとって、普遍的な現実と半生世界を画していた境界線は消失したのだが、半生世界がチップにとっての「本物」の現実に成り代わった瞬間に、新たな境界線が生じるのである。その境界線が引かれるのは、もはやチップにとっては偽物の現実となってしまった本来の現実であったり、ランシターにおける「本物」の現実であったりする。

このように、多層構造を持つ世界では、登場人物たちが常に境界線を打ち立てては、外部からの介入や異変との遭遇によって消失させるという作業を、無意識的に繰り返しながら、自己の在処を確立させていくのである。

3. 集合的無意識による多層世界の解釈

本章では、半生世界において登場人物たちが「本物」の現実を確立することを困難にさせて

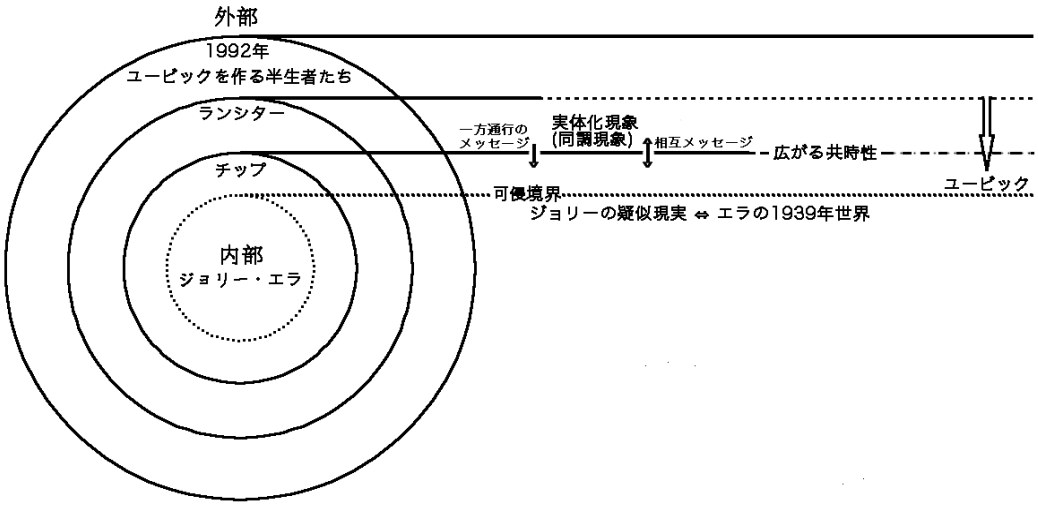
いたものの正体を追究する。

3.1 共時性と同調現象

半生世界の多層世界構造の基盤として、ユングが提唱した集合的無意識の概念が投影されていることを踏まえて考察していく。

集合的無意識の概念の中でも、特に共時性（シンクロニシティ）と同調現象（シンクロナイゼーション）という概念に着目する。この2つの概念は、分野によっては同義語として見なされることがあるが、ここでは『ユービック』内で発生する現象に違いがあるため、各現象を区別するために使い分けることにする。

まず、共時性とは、無意識の精神活動は、人と人、人と自然にまで広がって遍在しており、物理的身体の壁を超えてお互いに情報の交流を行っているというものである。ここでは、半生者たちが共有する空間を指すことにする。次に、同調現象とは、空間的に離れた人と人が、無意識に相互の心の働きによって生じさせる互いへの干渉のことであり、ここでは実体化現象を指すことにする。以下に、半生世界を形成する共時性と同調現象の働きを、視覚的に図式化したものを用意した。



円形部分は登場人物それぞれの半生世界の層を表し、最も内側には元々安息所に安置されていた半生者の意識空間で、外側に向かう程、新たに安息所に運ばれて来た半生者の意識空間が重なっていくと考える。最も外側に位置するのは、「本物」の現実世界に時間的・空間的により近い世界とした。更に厳密に言えば、半生者にも寿命があるため、外側に近い程、生命力が強いものとして言い換えられる。そして直線部分は、起点を月での爆発直後とし、作品の展開を線的時間軸で示した。左から右に向かって時間軸に沿って変容していく境界線に対する、共時性の広がりや同調現象の影響を表したものとする。上図においては点線部分が共時性による空

間の広がり、矢印が登場人物たちの強い心の働きによって現れる同調現象となる。相互メッセージというのは、内側と外側で隔てられていたチップとランシターが互いの前に現れ、会話を交わしたことを指している。

本章では、これらの作用が登場人物たちの半生世界に異変を起こしていた原因だと考える。

3.2 半生世界の「外側」と「内側」

作品の序盤で、「親愛なる同胞の安息所」の管理人であるフォン・フォーゲルザング（以下フォーゲルザング）は、ランシターの半生者の妻・エラに他人の意識が流入してきた問題について次のように説明している。

> “After prolonged proximity,” von Vogelsang explained, “there is occasionally a mutual osmosis, a suffusion between the mentalities of half-lifers. Jory Miller’s cephalic activity is particularly good; your wife’s is not. That makes for an unfortunately one-way passage of protophasons. ” [U.623]

この説明を聞いたランシターは、ジョリーの妨害によってエラとの交信がうまくいかなくなることを恐れ、フォーゲルザングにエラの隔離を依頼する。しかし、これに対してフォーゲルザングは次のように話す。

> “She may not like being isolated, Mr. Runsiter. We keep the containers—the caskets, as they’re called the lay public—close together for a reason. Wandering through one another’s mind gives those in half-life the only—”[U.624]

つまり、ジョリーだけでなく、他の半生者同士も互いの意識の間を往来することで孤独感を和らげていることになる。また、ランシターは月で死亡したチップに、現実世界での状況を説明している。

> “I’m sitting in a consultation lounge at the Beloved Brethren Moratorium. All of you are interwired, on my instructions; kept together as a group. I’m out here trying to reach you. That’s where I am when I say I’m outside; that’s why the manifestations, as you call them…” [U.772]

しかし、フォーゲルザングの説明を考慮すると、厳密に言えば、わざわざ相互接続をしなくても、半生者同士の意識は互いに流入し合っていることになる。しかしながら、可能性 C を否定する要因となったランシターの存在が不明なのが、ここで問題となっている。半生世界と生者の現実世界の間では、言葉しかやりとりができないというのが、『ユービック』の世界の前提

である。ジョリーが明言しているように、この前提から、ランシターがチップの前に現われた時点で、読者もチップも「本物」の現実では恐らくランシターは死亡しているだろうと考える。しかし、次のセリフが示しているように、ランシターだけがそのことに気付いていないのだ。

> "…I saved your life; I broke through to you enough just now to bring you back into full half-life functioning (中略) I'm Glen Runciter; I'm your boss and I'm the one fighting to save all your lives—I'm *only* one out here in the real world plugging for you." [U.773]

このように、ランシターは自分が生きていて、「本物」の現実にいることを主張している。そしてチップは、矛盾が多いランシターの解釈を打ち切り、自分の憶測を話す。

> "This is cold-pack, " Joe said, "but there's something more. Something not natural to people in half-life. There are two forces at work, as Al figured out; one helping us and one destroying us. You're working with the force or person that's trying to help us. You got the Ubik from them." [U.774]

ここでチップが推測した"one destroying us"（滅ぼそうとしている力）は、半生者を食い物にして生命を長らえているジョリーであり、"one helping us"（助けようとしている力）は、ランシターの妻エラである。チップによれば、「外側」に存在するランシターだけでは、チップの前に現れ、どこからともなく「ユービック」を手に入れてチップの生命を助けるということはできなかったと考えている。最愛の妻エラがランシターに、境界線を突破するための力を貸したのであろう。

作中に記されている通り、チップたちがランシターから指摘されなければ、彼らが半生世界にいることに気付かなかったように、死後間もない半生者は、外部からの決定的な介入がなければ自分が死亡したことに気付かない。このことが示すのは、ランシターが存在している世界は、チップたちの半生世界の更に外部にある、何者からも介入されない一人きりの半生世界ということになる。フォーゲルザングの説明では、強い生命力は弱い生命力の中に時折一方的に流入しているのだから、基本的には個々の世界が存在しているが、生命力の強さによって多くの生命力から流入される者と、一方的に流入する者が存在するということである。これが、図の円形部のように各々の世界の層を「内側」と「外側」に隔てて形成している要因になっていると考えられる。つまり、生命力の強さによって他人の無意識への介入の可否が決定するのではないかということである。フォーゲルザングが言うように、強いものから弱いものへの介入は容易である。このことから、生命力が比較的弱くなっているチップたちの半生世界では、ランシターやジョリーの強制的な介入によって異変が生じてしまい、チップたちは現実に対する認識を何度も改めさせられるのだ。反対に、死亡しても生命エネルギーの強いランシターには

何者も流入することができなかったため、ランシターの半生世界には異変は起こらず、ランシターが、自分が半生世界にいることに気付くことができないのである。

こうした外部の介入は、実社会において我々が物事への認識を改めるきっかけに相当する。影響力の強い人間の発言は、メディアなどを通じて無意識的に我々の認識に強制的に介入している可能性があるのだが、現実世界では、この意識上の介入を明確に提示することはできない。ディックは、他者からのそうした精神的な強い介入を、物質という概念が無い精神世界を生み出し、変容していく物象によって表現したと言えるだろう。

3.3 ランシターの無意識世界

チップたちの半生世界に存在する街やあらゆる道具は、ジョリーが作り出した仮想現実の産物であった。チップはジョリーから、“Dr. Taylor is a product of my mind,” “Like every other fixture in this pseudo world” [U.781]と、これまで自分が行動していた世界や関わった人物についての真実を知らされ、衝撃を受ける。

> “Then it’s all for me, just for me. This entire world.”
>
> Jory said. “It’s not very large. One hotel in Des Moines. And a street outside the window with a few people and cars. And maybe a couple of other buildings thrown in” [U.782]

しかし、ジョリーの言うことが真実だとすれば、これまで読み解いてきた半生世界の描写に、1 つの違和感が生じるのである。それは、1939 年に関わる時代のことである。ジョリーは、“I can’t keep objects from regressing”[U.782] と言うように、自分が疑似現実を創っても 1939 年に退行していく物体を止めることができない。更に、物体の衰退現象に関しては、作中では死後まもない半生者に起こる一般的な現象だというが、現代とされる 1992 年から、1939 年に向かう物体の退行現象については明らかにされていない。ランシターはチップに、世界の衰退や退行は半生者にとって普通のことであると言っていた。しかし、1939 年という年代に向かう退行現象だけは他とは違った要因が働いていると考えられるのだ。

この現象は、半生世界の退行が 1939 年にさしかかってからはほとんど発生しなくなり、前向きな線的時間軸の上を進行し、現在から未来へと時が進みはじめるのである。更には 1939 年の世界はあまりにリアルであったため、チップは訝しんだ。

> This detail was authentic.
>
> But how Jory know it?
>
> That’s peculiar, he thought; Jory’s knowledge of the minutiae of 1939, a period in which none of us lived—except Glen Runciter. [U.785]

チップはこのことを自然な先祖帰りだと解釈するが、実はこれもランシターの実体化現象の一部だと考えられるのではないだろうか。

『ユービック』において最も生命状態の謎に包まれているのはグレン・ランシターである。彼は月での爆発の後、チップたちの手で安息所に運ばれるが、半生命の維持が出来ずに葬儀が行われた。しかし後にチップは、ランシターの実体化現象から "ALL OF YOU ARE DEAD. I AM ALIVE" [U.717]というメッセージを目にする。このことから、チップたちは「本物」の現実世界ではなく、半生世界という仮想現実にいたことが明らかにされる。これ以降、不完全だったランシターの実体化現象は、次第に明確な意味を持ったメッセージへと発展していく。

作中では、ランシターの年齢は 80 近くということであり、1939 年はちょうどエラが 20 歳で死亡した頃の時期である。ランシターが半生命状態になったために、彼の無意識と、最愛の妻エラの無意識が同調現象を起こして、他者の意識を 1939 年という年代に引きずり込んだのだと考えられるのではないだろうか。更には、チップが自宅へ戻ったとき、彼の部屋にはあらゆる年代のランシターの写真が置かれていた。このことから、ランシターが半生世界に及ぼす影響は非常に大きく、特にエラやチップのように、彼と関係の深い人物の周辺で影響が強くみられるのではないだろうか。ランシターが半生者の居場所の把握をしていた点でもこれで説明がつくのである。任意の街で発生したランシターの実体化現象を見て、アルが"I wonder how we'd come here," "And how he knew we'd try that one particular carton" [U.708]と疑問を抱いたように、なぜかランシターはチップたちの行き先・行動・状況を把握している。チップたちの半生世界において、共時性によってチップたちと無意識レベルで交流していたランシターは、思いがけずチップたちの半生世界に尋常ではない影響を与えていたのである。チップの半生世界には、あらゆる場所にランシターの意識が遍在しており、実体化現象以外にもチップたちの半生世界に異変をもたらしていた。最終的には、ランシターはチップの半生世界に実体を伴って現われ、チップの身体を癒す万能スプレー「ユービック」を手渡す。しかし、その後チップを襲った半生者のジョリーは、ランシターがユービックを持ってチップの前に現われたと知り、こう話す。

> "But Runciter can't be doing it; you're right. He's on the outside. This originates from within our environment. It has to, because nothing can come in from outside except words." [U.781]

この"outside"とは、ジョリーの認識では「本物」の現実のことだと思われるが、多層的な世界構造の視点では、必ずしもランシターがいる場所が「本物」の現実とは言えない。

哲学者、三浦俊彦著『可能世界の哲学−「存在」と「自己」を考える』で、「法則が食い違う世界というのは、表面的な個々の事実が食い違う世界よりも、より大きく異なっている」[5]と述べているように、半生世界と現実世界では、時間や現象の法則が異なり、外部の介入が進むほど、半生者にとっての本来の現実にあった純然たる世界の法則は崩されていく。半生世界では

現実世界のような左から右へ流れる線的時間軸は存在せず、因果関係の法則さえもが消失してしまうのである。

ランシターは、自分は現実世界にいて生きていると言った。そして、チップとのやりとりを終えたあと、場面は安息所の面会サロンに変わり、冷凍棺に入れられたチップたちの前に座っている。しかし、言葉以外は入ってこられないというジョリーの発言が真実ならば、ランシターが「本物」の現実世界にいることは考えられない。その事実を決定づけるものとして、物語の最後にランシターが目にしたものは、ジョー・チップの顔が浮かび上がった硬貨であった。

4. 半生世界における「本物」の現実

半生世界は、実社会での我々が睡眠時に見る夢とよく似ている。ただし、夢との違いは半生者同士が無意識に一つの空間を、ある種の現実として共有しているという点である。この空間に、先ほど挙げた共時性が極端に表現されているのではないかと考える。さらに、ここには哲学者ヒラリー・パトナムによって提唱された「水槽の中の脳」という理論にもつながるのである。ただし、「水槽の中の脳」というのは、1987 年に定説化された概念であるため、ディックが『ユービック』を執筆した 1969 年にはまだ知られていないことになる。しかし、ディックはアジア思想にも食指を延ばしていたことから、荘子による「胡蝶の夢」[6]といった中国の思想から着想を得て、「水槽の中の脳」に極めて近い概念に行き付いていた可能性はあるだろう。

パトナムは、人間が生きている世界が一つの大きな自動機構によって構成された世界であった場合を仮定し、意識同士の交流について、「われわれはある意味では本当にコミュニケーションをしているのである」から、「「全世界」が集団幻覚だったとしても何の問題もない」[7] と述べている。チップも“Suppose, he reflected, we can’t reverse our regression; suppose we remain here the balance of our lives. *Is that so bad?”* [U.739]と同様の考えを示しているシーンがある。半生世界が「本物」の現実と同じような時間軸で進んでいく世界であれば、時代に慣れるという形で適応すれば、生きていくのには何の支障もないのである。

ディック研究者の折島正司は、『ユービック』において読者と登場人物は、「全体として宙吊りとなり、何事にも言及しないフィクション内フィクション構造と、それに伴ってどの焦点も極めて主観的な幻をしか見ることを許されていない」[8]と述べている。チップやランシターの主観的現実は、読者にとって半生者の仮想現実でしかなく、仮想現実は幻に相対する。しかし、その幻の中で環境がいかなる変化を遂げても、チップにとっては紛れもなく自分が存在する世界なのである。自我が存在する限り、認識できる世界を「本物」の現実とみなすことしか選択肢はないのである。そうして、この仮想現実からは永遠に「本物」の現実に戻ることはないと認識した時点で、チップは不条理な仮想現実を「本物」の現実として受容し、ジョリーと戦い生きていくことを決意するのである。

チップやランシターは強制的に先行していく時の流れに「ユービック」を用いて抗うこと

で、影響されやすい流動的な概念の世界に仮そめの物質を生み出し続け、自分の世界を構築していかなければならなかった。そして我々読者は、『ユービック』という作品そのものが、あらゆる形に姿を変える「ユービック」によって構築されている事実に気付かされるのだ。

半生世界に存在する全ての生命や物体は、「ユービック」のスプレーの効力によって保たれているに過ぎない。この世界の中で、全ての人間が「ユービック」に翻弄され、操作されているのだと考えると、最終章の冒頭で「ユービック」が神を名乗ることを認めなくてはならない。そのため、『ユービック』の登場人物の運命は、全てが「ユービック」の力によって強制的に決定づけられてしまう。唯一自分の判断で決定付けられることは、チップが「本物」の現実への境界線を消失させては引き直し、半生世界で生きて行くことを決意したように、次々に塗り替えられて行く不条理な世界を受容していくことだけなのである。

これまでディック作品は、多くの批評家に様々な解釈をされてきた。心理学や哲学的観点から、政治的観点に至るまで、実に多様である。中にはディックの神秘体験への熱心な探求姿勢や、哲学的見識の深さから、神学に結びつけたものもある。こうしたあまりに様々な解釈が存在しうるのは、ディック作品には結果として、一つも物事や出来事への明確な回答が用意されていないからである。しかし、ディックが心理学や神学的に強い興味を抱いていたことは間違いの無いのだが、それらは目的を追求するための手段に過ぎないように思われるのだ。

ジェフ・ワグナーが、「ディック宇宙におけるすべての現実に共通してひとつ確かなのは、つきつめていくと現実そのものが主観的であることだ」[9]と述べたように、ディックが描く世界は明らかに相対主義的である。特に『ユービック』はこれを極限まで突き詰めており、単独の主観的世界だけではなく、複数の主観的世界が入り乱れる作品世界となっている。自己の主観と他者の主観がこれほどまで交錯した世界は、社会を俯瞰し、「本物」と言われるものに疑念の眼差しを向け続けたディックにしか描けないだろう。

『ユービック』のチップを始めとする登場人物たちは、互いの認識や記憶によって変容させられた半生世界で、境界線を消失させては新たな境界線を仕切り直す。このように境界線は常に出現したり消えたりする曖昧な仕切りとなって存在しているが、この流動的な境界線こそが、自分にとって確実な「本物」を決定づける唯一の指標となっている。そして実社会に生きる我々も、他者の視線に晒されることで思考や認識に様々な影響を受けながらも、自分なりの「本物」を見定め、境界線を何度も引き直しながら生きて行くのだということを、ディックは SF を使って描いたのだと言えるだろう。

なお、本稿を『ユービック論』の第 1 部とし、続く「ユービック論[2]」を以て『ユービック論』の完成とする。

注

[1] 1975 年に書かれたダルコ・スーヴィンによるディック論では、ディック作品を大きく 1952-

62（初期）、1962-65（中期）、1966-74（後期）に分けている。しかし、後期に関しては更に 1970 年以降を「創造上の不毛期」として位置付けており、後期の最高潮作品としてユングの集合的無意識を極限まで表現した『ユービック』(1969)を挙げている。ただし、後にディック思想の集大成であり、グノーシス主義に主眼を当てた『ヴァリス』(1981)が生まれたことから、『ユービック』を区切りに、ディックが集合的無意識の観点からグノーシス主義思想に移行していく上で新たな創造開拓を模索し始めたとも考えられる。

[2] レム, スタニスワフ(1975)「ペテン師に囲まれた幻視者」p.213

[3] Dick, Philip K (2007) *Four Novels Of The 1960s* に収録されている。なお、*Ubik* からの引用
は、他作品と区別するため、[U.] と表記する。

[4] スーヴィン, ダルコ　上岡伸雄訳 「P・K・ディックの作品群――世界観と避難所としての技
能（紹介的考察）」p.147

[5] 三浦俊彦(1997)『可能世界の哲学　「存在」と「自己」を考える』p.42

[6] 荘子が蝶になる夢を例えに出して、自分が本当は人間であるのか蝶であるのか判然としないという、現実の不確実性への問いかけである。

[7] パトナム, ヒラリー　野本和幸他訳 (2012)『理性・真理・歴史　内在的実在論の可能性』p.9

[8] 折島正司 (1982)「フィリップ・K・ディックの『ユービック』」p.67

[9] ワグナー, ジェフ 浅倉久志訳「彼の書いていた世界の中で――フィリップ・K・ディックの生涯」『悪夢としての P・K・ディック』p.43

参考文献

Burton, James (2014). *The Philosophy of Science Fiction: Henn Bergson and the Fabulations of Philip K. Dick*. I. B. Tauris.

Barlow, Aaron (2005). *How Much Does Chaos Scared You ?: Politics, Religion And Philosophy in the P. K. Dick*. Lulu.com.

Currere, Emmanuel (2005). *I Am Alive And You Are Dead: A Journey into the Mind of Philip.K.Dick.* Pcador. Reprint.

Fitting, Peter (1975). “Ubik: The Deconstruction of Bourgeois SF*”. Science Fiction Studies.* Vol 2. March 1975.

Gillspie, Bruce (1975). “The Real Thing*”. SF Commentary 9*. February 1970. pp.11-25.

Lem, Stanislaw (1974). “Philip K. Dick: A Visionary Among the Charlatans”. *Science Fiction Studies.* Vol 2. March 1975.

浅見克彦 (2008)「Into the Abyss　「聖なるもの」と個体の裂開」和光大学総合文化研究所年報『東西南北』pp.67-95.

海老原豊 (2011)「フィリップ・K・ディック　存在の「黒い箱」と共感の地平」『SF マガジン』pp.217-223.

折島正司 (1982)「フィリップ・K・ディックの『ユービック』」東京医科歯科大学教養部研究

紀要 12. pp.61-67.
神林長平 (1983)「解説」『逆まわりの世界』早川書房.
カイヨワ, ロジェ　三好郁朗訳 (1978)『妖精物語から SF へ』サンリオ.
河合隼雄　吉福伸逸編 (1986) 『宇宙意識への接近』春秋社.
河合隼雄 (1995) 『ユング心理学と仏教』岩波書店.
齋藤礎英 (2003)「三つの入り口と一つの出口」『群像 10 月号』講談社. pp.186-194.
佐藤勝彦 (1998) 『「相対性理論」を楽しむ本―よくわかるアインシュタインの不思議な世界』
PHP 文庫
下條信輔 (1999)『「意識」とは何だろうか』講談社.
スーティン, ロランス編　大瀧啓裕訳 (2001) 『フィリップ・K・ディック 我が生涯の弁明』
アスペクト.
鈴木力 (2012)「フィリップ・K・ディック」『SF マガジン』pp.24-26.
立木鷹志 (2012) 『夢と眠りの博物誌』青弓社.
辻信太郎　発行 (1986)『悪夢としての P・K・ディック―人間、アンドロイド、機械―』サンリオ.
ディック, P.K　浅倉久志訳 (1976)「人間とアンドロイドと機械」『アジャストメント』早川書房.
天外伺朗 , 茂木 健一郎 (2000)『意識は科学で解き明かせるか』講談社.
パトナム, ヒラリー　野本和幸他訳 (2012)『理性・真理・歴史　内在的実在論の可能性』法政大学出版局.
ボードリヤール, ジャン (1984)『シミュラークルとシミュレーション』法政大学出版局.
マキャーネル, ディーン　安村克己　他　訳 (2013)『ザ・ツーリスト』学文舎社.
三浦俊彦 (1997)『可能世界の哲学　「存在」と「自己」を考える』日本放送出版協会.
三田格編 (1983)『あぶくの城――フィリップ・K・ディックの研究読本』北宋社.
山野浩一 (1971)「フィリップ・K・ディックの形而上学」『逆回りの世界』ハヤカワ・SF・シ
リーズ. pp.231-239.
湯浅泰雄 (1995)『共時性の宇宙観　時間・生命・自然』人文書院.
ユング, C.G 『自我と無意識』第三文明社.
若島正 (2011) 『乱視読者の SF 講義』国会刊行会.